不安と超越

—マルセルの『人間の尊厳』を読んで—

清　水　宏　子

I　現代的不安と人間の尊厳

変化のめまぐるしい現代社会に山積する諸問題の中でも，特に早急な解明が期待されるのは道徳上の問題であるといえよう。しかもその根本に横たわる人間の尊厳についての理解の有無は，人生の歩みを左右し得る鍵とも言えるもので，その人間の尊厳が崩壊の危機に瀕しているとも噂される現代に於いてその意味を探求してゆくことは，我々人間にとっての重要課題ではなかろうか。

最近ある雑誌[(1)]に目を通していて次の記事にふれた時，何か現代の人間の根本問題に通ずる課題がそこに投げかけられているのを感じて注目させられた。それは，ジム・ジャームッシュ監督の1980年作の映画『パーマネント・バケイション』の紹介で，次のように書いてあった。

「<どの人間も住んでいる部屋と同様，一定期間をすぎると，それぞれ固有の恐ろしい感覚に満たされはじめる。解決方法は常に一歩先に進んでいること，動きつづけることだ。>
そういって彼は自分の言葉に導かれるようにして動きつづける。
16才の若者のニューヨークにおける2日半の漂流に似た生活が映し出される。」

この言葉にふれた時，私は，現代の都会人の精神的不安感がひしひしと身に迫ってくるのを感ぜざるを得なかった。

また別の機会にNHKテレビの紹介で，老人性痴呆症の一つの症状として夜行性の散策があるということを知った。いわゆる惚け老人が真夜中の1時2時に1人で杖をつき又は2人で腕をくみ，何も言わずに薄暗い病院の廊下をうつろな表情で行きつ戻りつ動きまわる。それは脳神経細胞の老化による自己忘却の結果としての精神的不安からおこる現象であると説明していた。

これは高齢化の結果としておこる現代人間社会の実態の一つであるが，現代人の精神的不安には，何かこれに似たものがあるのではなかろうか。自己喪失。社会の組織という歯車の中でただ機械のように働きつづける人間。何か見えない糸に引きずられているのかのように，そうせざるを得ないような何ものかの力に動かされて，毎日混んだ電車にのり同じ所を往復して働く人間。今，一つの部屋又は建物の中でなしている自分の仕事が，より大きな連関の中で，社会にとっても自分にとってもどのような意味をもっているのかもわからずに働

く人間。そのようにして造り出された生産品が，どこに，どのようにして送り出されるのかも知らない。現在働いている自分の仕事の過去と未来の連関もわからない。わかろうとすれば不安になるから，目先の仕事に没頭してそれ以外のことは考えまいとする人間。

結局，毎日働く自分の仕事の場で真の自己を見出し得ない不安。多数の人間にかこまれながら，大きな組織という機械の一つの歯車的存在にすぎないと感ずる孤独な人間。

こうして巨大な組織の中では，前の歯車が伝えてくることをただ忠実に次の歯車へと伝達してゆく機械の中の一部分としての歯車的利用価値（それは，すりへれば又取換え可能なものとして）しか見出し得ない自己の立場（人間疎外）への人間的不安と焦燥。

これはすなわち，巨大な組織の中での一ごく一部の人間をのぞいては一考えない人間が考えない人間を支配するという現実であり，そして又，その危険性を知る者の不安の原因でもある。そしてこのような不安からの解放の道もとざされた人間のなし得る唯一の道は逃避と忘却であり，ただ生きるために夢中になって働き，そのあとは飲み，さわぎ，忘れようとする。

すさまじいほどの科学・技術の進歩のかげにも不安の雲は日々拡がる。人間存在の根源も考えずに人の生命の存続の鍵を握り，又はその誕生の神秘さえもあやつり支配しようとする現代世界の行方に対する不安。

大人の世界の不安な現象は，そのまま成長発育期の子供や若者の世界に反映している。将来成長したあかつきには，このような不安に満ちた社会に組みこまれる運命を背負って，青少年達は望むと望まざるとにかわからず現行の教育制度の中で一方的にさまざまな知識をつめこまれる。それについてゆけないのが“落ちこぼれ”る。成人後の職業の選択は，社会の人材的需要に応じて，組織的に利用価値の大きい場を探すことが社会的に生きのびてゆくための道である。多くの場合，自主性・創造性は機械的組織の中で働くには妨げとなり，それでも尚かつ自己に忠実に生きようとすることは生活の不安に立ち向かうことである。真の自己を模索しながら生きる青少年の前に立ちふさがるのは，夢と現実の中での矛盾と葛藤と不安であり，そして度々青少年の非行は，このような現実からの逃避の一形態に他ならないのではなかろうか。不安に満ちた現代社会に生きる人間にとって，人間の尊厳とは何を意味し，又それを何処に見出し得るのか。

Ⅱ　不安が意味するもの

上記のような人間をとりまく不安に満ちた社会現象を観察しながら，私には不安という現実は，単なる表面的な感性の対象ではなくその奥底に何か深い人間性が示唆されているように思われる。人間の精神的な奥深いところから出てくる不安，これこそ人間性の叫び，人間らしく生きたいと望む人間の根源的な願望の表われではなかろうか。人の死に対する恐れは，人が本来的に生きるものだからであり，その生への希求はさまざまな形をとって表われる。戦争への不安は平和に生きたいと望む人間の本性的な叫びであり，飢えの恐れは生きるものとしての人間の生に反する状況への本性的な拒絶である。

このような人間の生を抑圧する不安な状況への本性的拒否反応は，日本の現代社会の中にも同様にみられる現象である。現代日本社会の中での歯車的人間の「考えることのない生」への不安は，人間が元来「考える」存在だからであり，日々より深く思考してゆくことによって自己の実存の意味を見出してゆく筈のものだからである。そして，このような自らの思考にもとづいた主体的な活動は，人としての生の確認ともいえる安定感を人間にもたらすのではなかろうか。逆に「考える」ことからの逃避は—これは現代社会の中間管理職的立場におかれている人に多い傾向でもあるが—，それがどのような形で行なわれようとも，人としての本来的尊厳にかなう生き方の棄権であり，社会の組織に束縛された—いわゆるがんじがらめにされた—人間の，現代社会に対する絶望の表現であるともいえよう。社会生活に対する人間の本性的失望は，人を小さな家庭という私生活のうちに志向させ，次第にマイホーム主義的傾向に落ち入ってゆく。このような人にとって，社会生活は単に生きる糧を得るために働く場と化し，逆に社会生活において満たされない人間の本性的志向性は，主として家庭生活の中にその充足を探すことになり，ここから社会生活の中で無気力・無関心・無責任という全く主体性の欠除した状況が生まれてくるといえるのではなかろうか。

このように考えてくると，人間はやはり人間として本来的に単に受身の状態にあるべきではなく，主体的・能動的にその本性に附与された能力を活用して思索し行動してゆくべき存在だということが，人間自身の不安によって証明されていると言えよう。不安はその奥に秘められている人間性の証しでもあるのである。

Ⅲ　マルセルにおける“人間の尊厳”

ガブリエル・マルセル[(2)]はその著作活動を通して，絶えず，現代社会の中で無意識的にその社会的機構に翻弄されている人々に向かって，人間の人間としての価値を訴えつづけてきた学者である。その思索は深く，時には難解さを伴なうものの，それでもなおかつ，それを読む現代人に深い共感と感銘を覚えさせるものがある。

現代の人間の危機に関する彼の洞察と予言的な発言[(3)]は，その30年後の現在にそのまま正確に実現しつつあるのを目の当りにしながら，私は彼の言葉を繰り返しかみしめてみたい思いにかられ，彼がどのように人間を観察しとらえていたかを，ここに簡単にまとめてみることにした。何故なら，彼は彼なりに不安な時代[(4)]と不安な境偶[(5)]を体験してきた人だからである。

注目すべき点は，彼の人間の尊厳のとらえ方は，彼がカトリック信者でありながら教会の一般文献[(6)]の中に見られるような方法とは異なった実証の道を歩んでいることである。辿り着くところは同じであっても，彼の哲学者・思索家としての良心は，人間の尊厳を，ただ上から与えられたものとしてではなく，下からの，言わば人間のあり方そのものの中から探り出してゆく道を彼に選ばせる。

「人間の尊厳性は，何らかの形の信仰宣言によって，すべての人の父である神を公に認

める人にしか肯定されない。つまり神に似た姿という点においてのみ人間の尊厳があらわれると考えることは間違いだと思いますし，間違いでないとしても，ともかく無思慮なことです。(中略)そういう考えを受け入れることは不信仰者（中略）も実際に人間の尊厳性を求める敏感な心をもつことが出来，その行為をもって，決して否定し去ることのできない証しを示すことができるという事実を無視することになるでしょう[7]。」

そして彼は，「能動的な感受性についての深い思索[8]」を重視し，そこから人間観や人間の尊厳についての方向づけを見出してゆこうとする。

しかし彼にとっては，ありのままの人間について思索し，「人間の尊厳さの中核にある秘義に満ちた真理を保持するためには，それに固有な元来聖なる特質を明らかにしなければならない[9]」のであるが，その特質は着飾った人間に見出すのはむつかしく，むしろ「われわれが人間存在を裸にして，その弱さにおいて，子供や老人や貧乏人にみられるような丸腰の姿において見つめれば見つめるほどはっきりしてくるものである[10]」ことを示唆している。

このような思索の道をたどろうとする彼の論述は，単に抽象的な人間の分析ではなく，かえって現実の状況の中から，人のあり方，人間らしい反応，ひいてはその奥にある人間の価値を浮き彫りにしてゆくような道を辿っていく。次の表現の中に，彼の思索の立場と姿勢がうかがわれる。

「われわれがおかれている歴史の一時期において，技術絶対化の道を進む世界が心の生を圧する脅威を前にして，哲学者は，その個人の信仰のいかんにかかわらず，実存者としての，世界の中の存在としての人間の状況の中に，……抽象的に限定される合理性の次元にではなく生と死の境地においてたしかめられるべきものと思われる，このすて去ることのできない人間の尊厳性の本当の根拠を探さなければならないだろう[11]。」

こうして彼は，ある特殊の状況の中にではなく，日常のごく普通の生活の中に人間性への脅威を感じとり，それを叙述した。「パリの周囲」，「非人間的な巨大な建物」，その中で「事物のように片づけられ」ながら住んでいる人間。このような状況の中で「今日，人間存在の上にのしかかっている普遍的な脅威を，ほとんど体感的な直接性をもって感じるのです[12]。」とのべているのは，彼のみでなく，“解体”してゆく人間性についての敏感な感受性を有する多くの人々が現在尚感じつづけていることである。

こうして彼は，現実の状況の中で人間をむしばむものについて，そのデリケートな観察を表明している。

「現代文明国といわれる国々がわずらっている癌のようなもの」として「官僚主義的傾向」をあげ，「単に数字と抽象的記載の積み重ねだと見えているものが，その実，だんだんと人間をおかし，その個人としての具体的存在をおびやかすようになる[13]」こと，又は税制度のもとで，「国民のすべてが税務補佐官と脱税犯人とに，同時に，しかも両者相関的に，ならさ

れる」という矛盾，この「人々を不条理な事態のもとに生活させること」は「不可避的に，人々を内面的に解体させ，さらには知的にも解体させることなのである。」[14] という洞察には鋭いものがある。そしてこのような洞察は，日頃我々が毎日当然のように何気なくやりすごしている現実の中に，人間性を押しつぶすような制度的な巨大な暴力が潜んでいることを否応なしに我々に認識させるのである。

この，人間を押しつぶしてしまいそうな現代社会の構造的組織的暴力は，これから未来を夢見ようとしている少年少女の世界にまで押し迫ってきている。次のマルセルの言葉は，現在の日本に於けるまだ学業に従事している年頃の青少年の非行の多発と考え合わせて，深い意味をもっているように思われる。

「この自在な感受性，眼の前に現われてくるものに対して貪欲に開かれた心とは，普通，物事や言葉にたいしてまだ無神経になっていない子供の中にみられるものです。つまり彼らの知識欲は，まだ，彼等が学校へ行く頃ほど鈍ってはいないのです。その頃になると，情ないことに，ほとんど宿命的といってよいくらい衰えてしまうのですが。子供達がそうなるのは，彼らがそれを自分自身で探したり，望んだりすることを前もって教わらなかったような，知識の重みに圧しつぶされてしまうからなのです。そこに何故そうした知識が，学校では，内面的な成長や身体の発育の結果えられるようなものとは違う，真の知識に反した見せかけの知識としかならないかということの見逃せない理由があるのです。」[15]

生まれながらにして持っている生き生きとした感受性と知識欲が，人によっては学校へゆけばゆく程宿命的に鈍り衰えてゆく，この現実こそ，人間性の抑圧でなくて何であろう。日本の学校制度と社会の仕組みは，特に就職や受験に直結するような断片的でしかも実際的な，効果をすぐもたらしてくれる知識を学問に期待させる。その結果度々学業は，人間のためというよりはむしろ，受験のための知識の積み重ねを成長期の若者に無理強いし，ゆがんだ人間性の発育の原因ともなっている。このような教育の実態は，まさにマルセルが「真の知識に反したみせかけの知識」と言ったそれに匹適するのではなかろうか。そして，マルセルの人間性についての注意深い洞察の目は，現在いたるところにみられるこのような個人の解体や無視のあるところに，その弱さの中で，人間のうちにおのずから，自己崩壊に対する抵抗が生まれてくることに注目する。[16]

彼は或る箇所で，ハンガリーの動乱の例をひきながら，あれほどに強かった民衆の反抗は虚偽への反抗であり，存在が辱しめられることによって傷ついた，認められたいという意志の表われにほかならないと説明した。認められたいという意志は真理であり，自己自身に対する尊敬に通ずるものである。そして「抑圧者が被抑圧者からこの尊敬（自敬 self-respect）を剝奪してしまおうと」[17]する時，それは抑圧者の追求している目的にいかなる点でも反対しない道具に個人をかえてしまうことである。「しかし，『自己にたいする尊敬ということは，まさに自分を道具のようなものにしてしまうことにたいする，断固たる拒絶を含んでいるの

です。[18]」という表現の中に，いかにふみにじられても屈したままでは終り得ない人間の尊厳を垣間みさせているといえよう。

Ⅳ　超越への招き

マルセルの洞察力は更に発展して，人間崩壊につながる環境的諸状況に抵抗するように人間の内奥に必然的に胎頭してくる能動的感受性を敏感に把握してゆく。その働きはまさに，人間の人間にしかない能力によるものであり，秘義的な人間の特質に根ざすものでなくて何であろう。

その人間の内奥に胎頭する働きとは，彼の言う発見[19]であり，感嘆[20]であり，創造[21]であり，兄弟愛[22]でもある。見せかけの知識に対する抵抗が発見であり，人間疎外の結果としておこる精神的虚無感から人間をよみがえらせるのは感嘆であり，現代の組識や高度な技術による人間の奴隷化から人間を立ち上らせるのは創造であり，人類の「あらゆる種類の分裂に反対するもの[23]」が兄弟愛である。そして彼は，これらの能力の中に，人間が人間の有限性を超えた世界からの招きに応える力を秘めていることを感じとっているのである。

「…発見というもの…，われわれはそこに，もっとも野心のない，もっとも自由な活動，さらにいえば，人間存在の開花にもっとも力強く貢献できるような活動の一つを見るのです。[24]」

「私には感嘆する力を欠くことは最大の不幸に思えるのです。私はつねに感嘆は創造に接するものであり，あたかもありがたい恵みのようなもので，それによって何か眼に見える創作を行なう天分に恵まれていないものでも，何とか創造的な精神の次元に達することができるのであります。もしこういう感嘆と創造とが相接しているという考え方が驚きを誘うとしたら，それは人は創造と生産とを混同しがちだからだと思います。しかし全く一般化して，あらゆる生産は技術の分野に属し，創造は逆に超技術の秩序にあるということができるのです。このことは初めは単に言葉の上のことのように思われるかもしれません。しかし私がいわんとすることは，あらゆる創造は実際には受けた呼びかけにたいする応答であるということです。[25][26]」

彼は，ルーマニア評論家　E・M・チョランの言った「私は奴隷であると共に，私が作ったり操作したりするものの道具なのだ」という言葉に対して，チョランが見逃していると思われるものが一つあるとし，「それはどんなつまらない水準においてでも，創造があるかぎり，何らかの自由があるということ[27]」だと述べており，創造性がいかに人間にとってその本質的存在にふれるものであるかを示している。すなわち，創造も発見も現在の有限性をはみ出した世界への一歩であり，感嘆は常識を超えた世界のひらめきへの憧景であり，そして兄弟愛とは，限りある存在を超えた秘義的存在への尊敬[28]であり，こうしてマルセルは，人間の

能動的感受性の中に，有限の世界を超えた世界すなわち超越にむかって開かれた存在としての人間の秘義を見出してゆく。「感嘆は常識を超えた世界のひらめきへの憧景である」と今のべたが，このことはマルセルの言う，「感嘆は創造に接するものであり…それによって…創造的な精神の次元に達することができる」[29]という考え方と密接なつながりがあると言える。それは簡単に言えば，超越のひらめきへの憧景としての感嘆は，同時にその魂に対する超越への招きとも呼びかけとも言えるものであり，その招きを感じ受けとめた時に，その魂は創造的精神の次元へと大きく飛躍することが可能となるからである。

感嘆のない生活は無味乾燥である。しかし感嘆のあるところ，厳しい日常生活の中にも人の心はうるおい蘇生させられる。そして感嘆に導かれ強められて人は新しい人生の創造への一歩を踏み出す。他人の事には無関心な人の多い世の中にも，全く関係のない他人の必要性のために尊い時間を割いて奉仕する若者の姿を見出す時，深い感動を覚えると同時に，それは新しい人生の創造への招きでもある。それは人間の有限性を超えた愛の世界にふれ，愛に生きるようにと受けた招きであるともいえよう。すぐれた行為，すぐれた人格との出会いはこうして人の心に感嘆を呼び覚ます。キリスト者にとっては，十字架上のキリストとの出会いは絶対超越者の愛の奥義にふれることであり，人の生涯の歩みを大きく変える力さえも持つのである。この世の生活の重みに疲れ果て，あやまち，つまずき倒れる者が，罪さえも包み込む偉大な愛にふれて感動する時，その心にはすでに新しい人生への創造的歩みがはじまっていると言える。聖書に出てくる「姦通の現場で捕えられた女」[30]にしても，イエスと出会って「回心したザアカイ」[31]にしても同様である。その他，過去現在未来の多くの人々が，人生の歩みの中に超越的愛にふれて感嘆し，罪から回心への道を繰り返しつつ辿ってゆく。これこそ絶対超越者の招きに応えながら，生きているかぎりその生涯の創造的歩みを続けてゆこうとする，人間の尊厳の光り輝く姿ではなかろうか。マルセルは次のように言った。

「人間存在の本質は，この超人格的な光にたいして自らを開くことができるところにあり，そうした可能性がいわゆる人間の尊厳ということに何らか関係しているのだと答えることができるでしょう。」[32]

と。

ここで，はじめに掲げたマルセルの「不信仰者も実際に人間の尊厳性を求める敏感な心をもつことができ，その行為をもって，決して否定し去ることのできない証しを示すことができる」[33]といった言葉の意味が更に明らかになると思う。

「何らかの形で虐げられたものにたいする積極的な態度…そういう態度は具体的には，守られるべき人びとにたいする兄弟愛的関係をもとうとする心を含んでいるのです。そういう不信仰者は，気づかずして結局，彼らの自由思想家としての意見に，神的な父性への信仰をかくしているのだというべきでしょうか？（中略）　彼らが真に今いったような実践的

な徳をもっている場合は，彼らのうちには人間の条件，つまりそれが含んでいる偶然的なものとか，頼りなさとか，さらには悲劇的なものだとかのすべてにつきまとっている秘義についての生き生きとした，胸をつくような体験があるのだ[34]」

と言えると説明している。

こうして彼の思索は，弱さと限界的状況の中に置かれた人間の有限性の中からもり上ってくる能動的感受性が，有限性をふみこえた超越的存在を志向し，それにむかって開かれていること，そして，そこにこそ人間の尊厳の本質的な根源があることを見出してゆく[35]。人間の尊厳とは，人間の完全性でもなく[36]，機能的能率的社会への寄与でもなく[37]，そのような人間性の抹殺の危機をのりこえてなおかつ永遠の超越に向かって希望しつづける存在，そこに他の何者も抹殺し得ない人間の尊厳があるのである。

Ⅴ む す び

ここで，この研究の最初にあげた映画『パーマネント・バケイション』の中の主人公16才の若者の“常に一歩先に進んでいること，動きつづけること”と言った言葉を思い出す。私は作者が何を意図して若者にこのような言葉を言わせたかを知らない。しかし私はこの言葉のうちに何か現代の，人間性への重圧をのりこえようとあがいている人間の姿を感じる。そしてそれをのり越えるための唯一の道は重圧の下に屈服する以前に一歩先を歩むこと，人間性への脅威がおそいかかろうとする時，その一歩先に，その人間性においてみずから自由に超越をめざして主体的に歩むこと，このような意識的歩みこそ人間性において生きていることの確認であり，人間の尊厳の輝きの一端を垣間見させてくれるものであるように思う。そして，その“人間として人間らしく一歩先を歩むこと”，それは具体的にはマルセルの言う発見であり，感嘆であり，創造であり，兄弟愛であり，希望であるのではなかろうか。

押しつけの知識への挑戦としての発見，機械化・組識化された人間社会でのあらゆる感動の剝奪的傾向に対抗する感受性としての感嘆，考えることを阻止しようとする現代の社会構造的圧力に対する拒絶としての創造，組織の末端的存在の中にある人間関係の冷却・断絶への抵抗としての兄弟愛，どんな絶望的状況の中でも捨て去り切れない憧れとしての希望。人間性の抹殺を拒否しながら現代に生きつづけようとする人々の心に，その内側からもり上ってくるこれらの志向性は，何か立上る力と勇気を与えようとする。それこそ，人間存在の奥にひそむ，人間にしかない，目に見えない価値の実在を示唆しているといえよう。

道徳教育は人を，人間性の完成へと導くものである。人間性は生きている人間の行動の中に見出されるものであるから，道徳も同じく生きている人間の活動の中に展開されてゆくものであって，単なる理論や抽象で終るべきではない。だから現在生きて動いている人間の中に，そこにひそむ尊敬すべき価値とその“尊厳”を見出さないかぎり，道徳は理屈にすぎないものとして終ってしまうだろう。

私はこのマルセルの論についてのささやかな研究を通して，生きて動いているものとして捉えた人間の生活の中に，生きている意味を見出させる根源としての人間の尊厳を見出したいと努力した。何故なら，この人間の尊厳に対する心底からの尊敬なしに，真の道徳生活も道徳教育もあり得ないからである。多くの青少年と大人達の中に見られる無気力・無関心・無責任といういわゆる三無主義は，人間としての偽り的又は非人間的生き方に対するささやかな抵抗であり，それを責めるよりもむしろ，そこにひそむ人間としての実存からおこる真実の願望に一刻も早く気づき，それに対処してゆくことが要請されている赤信号であるともいえる。

超越へと招かれている者が，たとえ無意識的にでもその実現の道を見出し得ない虚無感は，人の一回きりの人生の意味を奪いとるものであり，それを解決してゆくことは現代社会の緊急課題である。せめて未来を背負う若者に，どのような状況の中ででも常に超越を目指して歩み得る道順をさし示してやること，これこそ道徳教育にとっての根本的な課題ではなかろうか。

〔注〕

（1）『あけぼの』第31巻第9号（聖パウロ女子修道会1986）p. 18参照。
（2）Gabriel Marcel（1889～1973）。フランス生れの現代哲学者。カトリック信者。サルトルとほぼ同時期にキリスト教的人生観に基づく実存主義的哲学を展開した。
（3）『マルセル著作集8，人間の尊厳』（春秋社1973）中の「常識の衰退（1958）」（p. 13～p. 86）参照。
（4）1914年，マルセルが24才の時に第一次大戦勃発，彼は戦場の兵士の情報を留守家族に伝える赤十字関係の仕事に従事し，この悲痛な人間体験は，後日の彼の実存的思考の形成に大きく寄与したという。又，1939年49才の時第二次大戦勃発，1940年パリ陥落，その後占領下の暗い時代を体験した。
（5）1893年マルセルが4才の時に母死去，その後は父の後妻となった叔母の手で育てられた。
（6）種々の文献があるが，現代の代表的なものとしては，1965年12月7日に第二バチカン公会議に於いて発布された『現代世界憲章』が，その第一部第一章を「人格の尊厳」と題して，キリスト教の啓示が信ずる者に対して照らし出す人間の秘義の偉大さを説明するのにあてている。
（7）『マルセル著作集8，人間の尊厳』（春秋社1973）の「第七講人間の尊厳」中のp. 177～p. 178参照。
（8）同上，「第七講人間の尊厳」中の p. 172参照。
（9）同上，「同上　　」中の p. 173参照。
（10）同上，「同上　　」中の p. 173参照。
（11）同上，「フランス版序」中の p. 43参照。
（12）同上，「第七講人間の尊厳」中の p. 168参照。
（13）同上，「常識の衰退」中の p. 26参照。
（14）同上，「同上　　」中の p. 27参照。
（15）同上，「第一講出発点」中の p. 52参照。
（16）同上，「第七講人間の尊厳」中の p. 179参照。
（17）同上，「第八講兄弟愛と自由」中の p. 193参照。
（18）同上，「同上　　」中の p. 194参照。
（19）同上，「第一講出発点」中の p. 53参照。

(20) 同上，「第七講人間の尊厳」中の p. 170参照。
(21) 同上，「同上　　」中の p. 170参照。
(22) 同上，「同上　　」中の p. 177参照。
(23) 同上，「第八講兄弟愛と自由」中の p. 192参照。
(24) 同上，「第一講出発点」中の p. 53参照。
(25) 「受けた呼びかけに」と書いてある所は，引用原本には「受理した呼びかけに」と訳されていたが，内容上「受けた」の方が日本語として適当のように思われたので修正した。
(26) 『マルセル著作集８，人間の尊厳』（春秋社1973）の「第七講人間の尊厳」中の p. 170～p. 171 参照。
(27) 同上，「第九講危機に瀕する完全性」中の p. 204参照。
(28) 同上，「同上　　」中の p. 202参照。
(29) 註(26)参照。
(30) 『新約聖書』ヨハネ８の１～11。
(31) 同上　　ルカ19の１～10。
(32) 『マルセル著作集８，人間の尊厳』（春秋社1973）の「第六講私（モア）とその両義性」中の p. 140 参照。
(33) 同上，「第七講人間の尊厳」中の p. 177参照。
(34) 同上，「同上　　」中の p. 177参照。
(35) 同上，「第八講兄弟愛と自由」中の p. 180参照。
(36) 同上，「第九講危機に瀕する完全性」中の p. 201参照。
(37) 同上，「同上　　」中の p. 208参照。